
コナンと哀の漂流記

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンと哀の漂流記

【Nコード】

N0664Y

【作者名】

白波

【あらすじ】

蘭が当てた福引のチケットを使ってとあるツアーに参加していたコナンと哀。しかしツアー参加者の乗った船で起きた事件を調べているときに何者かに海へ落とされてしまう。そして、目が覚めると哀と共に無人島に流れ着いていた。

プロローグ

小五郎と蘭、コナン、哀、平次、和葉は蘭が商店街の福引で当たチケットで豪華客船に乗っていたが同じツアーに参加していた霧待小枝子さんが殺害されるという事件が起き小五郎とコナン、哀、平次はそれぞれ事件について調べ始めた。

105号室

「灰原：霧待さんやほかのツアー参加者について何かわかったか？」
とコナンが聞くと哀は

「そうね…私が調べた限りだと、霧待さんの事はわからないけど…ツアー参加者の船亀陸斗ふねがめりくとについてならインターネットで検索したら出てきたわ…。」

と言った。

「それで…船亀さんってのはどんな人なんだ？」

とコナンが聞くと哀は

「船亀さんはサバイバルチームのゲームのリーダーのようね…あなたの方は何かつかめたの？」

と言った。

「ああ…今回のツアー参加者で小枝子さんが亡くなったとみられる時間そらなしえりこにアリバイがないのは船亀陸斗さん、空梨恵理子さん、陸川隼人やとさんの三人…だが気になるのは小枝子さんが残した…」

とコナンが言うと

「血で書かれた鉛の文字とカタカナのクヤろ…。」

と言いながら平次が入ってきた。コナンが

「ああ…。」

と答えると少し考えてから

「そうか！」

といい部屋を飛び出した。それを

「ちょっと！江戸川君！時計型麻醉銃忘れてるわよ！」
と言いながら哀が追いかける。

「工藤！俺をおいてくな！」

と平次が言ったが二人はすでにどこかへ行っていた。

208号室

コナンは床にある文字を見ると

「やっぱりそういうことか…。」

とつぶやいた。すると

「まったく…相変わらず気に入らないわね…自分だけ真相がわかった時に顔…。」

と言いながら哀がやってきた。

「わーたよ！話すから…一旦甲板に出よう…。」

とコナンが言くと二人は甲板に向かった。

甲板

「それで…誰が犯人なの？」

と哀が聞くとコナンは

「まずは床に書いてあった…」

と説明を始めるが突然後ろから何者かに口をふさがれた。コナンと哀は手から逃れようと抵抗するがその人物は軽々と二人を持ち上げ海に落とした。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

第1話 助かったはいいけど…

「君…君…江戸川君！」

と言う声でコナンは目を覚ますと哀の顔が視界に入った。

「ここは…。」

とコナンが聞くと哀は

「わからないわ…どこかの砂浜だつてことは確かだけど…。」
と答えた。

「なるほど…あの後海流がなんかに流されてこの砂浜に流れ着いて助かったつてわけか…。」

とコナンが言うとき哀は

「そうね…でもそう喜んではいられないんじゃない？」
と言った。

「どういう…」

と言いながらコナンが後ろを見るとうつそつとした森が視界に入つた。

「あんまり長い時間海にいたら溺死してただろうから船の航路から察するにここはどこかの島…今の所は人の手が入っている形跡は見当たらないわ…。」

と哀が言うときコナンは

「無人島つてわけか…。」

と言った。すると哀は

「まだそうと決まつたわけじゃないわ…島を回れば集落の一つや二つぐらいあるだろうし飯になかつたとしてもまかつた船が通らないなんてことないと思うわ…。」

と答えた。

「とにかく今日はもう日が傾いてきてるから何とか寝られる場所さがさねーと…。」

とコナンが言うってから歩き出すとき哀は

「そうね…。」

と答えコナンの後ろを歩きだした。

南の砂浜 付近

「この洞穴なんかいいんじゃないか…。」

とコナンが言う悲哀は

「そうね…雨風もしのげそうだし…でも、ここで二人寝るの？」

と哀が言った。確かにコナンが見つけた穴は島の真ん中にある山の岩肌に開いた子供二人がやっと入れるような大きさの穴である。

「しかたねーだろ…もう暗いんだから…あんまり歩き回るとあぶねーし…。」

とコナンが言うが哀は

「あのね…あなたも私も外見はともかく中身は高校生よ…。」
とかなんとかぶつぶつ言いながら結局洞穴に入っている。

「素直じゃねー奴…。」

とつぶやくとコナンも洞穴に入った。

次の日…

南の砂浜

「やっぱりこの周辺に人の手が入ってる様子はないわね…。」

と言いながら哀が周りを見るとコナンは

「ああ…昨日は暗くてわからなかったけど…結構広いな…この海岸…。」

と言った。

「そうね…とにかくここで救助を待つか島に住人がいるのにかけるか…どうする？江戸川君…。」

と哀が聞くとコナンは

「そうだな…とりあえず海岸を歩いてみて様子を見ようか…。」
と答えて歩き出した。

1時間後…

「駄目ね…道と言うのもが存在しないのかしら…」

と哀が言うとコナンは

「そうだな…最悪の場合は比較的歩きやすそうであっちの森を突破するしかなさそうだな…」

と言いながら向こうに見える森を見た。

「森を突破するって…結構大変なんじゃない？何がいるかわからないし…」

と哀が言うとコナンは

「いや…どちらにしろ何か食べ物や水がいるから結局森には入らないといけないからどうせなら集落もないか探せばいいんじゃないか？」

とコナンが聞くと哀は

「そうね…」

と答えて向こうの方へと歩き出した。

第1話 助かったはいいけど…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第2話 島内探検！（南の海岸・東の森）

南の砂浜 東の森付近

「それにしても…かなりうつそうとした森ね…。」

と哀がつぶやくとコナンは

「そうだな…近くに來ると思ったよりもうつそとしてるな…。」
と答えた。

「とにかく…入るぞ…。」

と言いながらコナンが森に入ると哀はそれに続いた。

東の森

「ねえ…江戸川君、さっきの場所に戻れるわけ？」

と哀が聞くとコナンは

「そこらへんは大丈夫だと思っけど…。」

とコナンが言くと哀は

「ちよつと！目印もなしに來たわけ！」

と言った。

「砂をまいても消えるだろうし、この森は洞窟とかと違って早々迷いはしないと思っけど…。」

とコナンが言くと哀が

「…バカね…それじゃ迷子になるに決まってるわよ…。」

と半ばあきれ気味に言った。するとコナンは

「冗談だよ！石を落してるからさ…。」

と弁解した。

「まったく…。」

と哀が言くと二人はまた歩き出した。

東の森 東の平野付近

二人が森の中を歩いているとコナンが立ち止まった。

「どうかしたの？江戸川君…。」
と哀が言うとコナンは指を立てて
「なにか聞こえる…。」

と言った。哀もコナンがやっているように耳を澄ましてみると
「水の音ね… かすかだけど…。」
と言った。

「こっちの方みたいだな…。」
と言うとコナンは歩き出して哀はそれに続いた。

東の泉

「ここだったのね…。」
と哀が山からの湧水で満たされた小さな泉を見ながら言った。
「そうみたいだな… これで水の確保はできたな…。」
とコナンが言うと哀は

「まっいざとなったら文句は言えないし…。」
と言いながらあたりを見回して

「でも… 水をくむようなものはないわね…。」
と言った。

「とりあえず場所はこの石をたどって見つけるとして… 水を汲める
ようなものと食べれそうなものを探すか… ここで何日居ることにな
るかかわらないし…。」

と言うとコナンは再び歩き出した。
「それもそうね…。」
と言うと哀はそれに続いた。

東の平野

二人がしばらく歩くと少し開けた場所に出たそこには建物らしき
影が点々と見える。

「あれって集落か何かかしら？」
と哀が言うとコナンは

「行ってみるか…。」
と言いながら歩き出した。

東の平野 海岸付近

二人は建物があるあたりに来ると周りで人が住んでいそうな建物を探したがどれも廃墟となっていた。

「この島にはかつて人が住んでいたけど今はいないみたいだな…。」
とコナンが言うと哀は

「あら…まだ島の半分も歩いてないわよ…。」
と言うとコナンは

「確かにな…おそらく島の半分も来てないだろうな…。」
と言った。すると哀は一つの建物に入って行き

「でもそれほどたつてないみたいよ…使えるものは結構あるわね…。」

「
と言った。」

「それじゃあこの建物の中をいろいろとみてみるか…。」
とコナンが言うと二人はあたりを調べ始めた。

第2話 島内探検！（南の海岸・東の森）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

前の更新からだいぶ経ってしまいました…。

これからもよろしくお願いします。

第3話 島内探検！（東の平野）

コナンと哀が集落跡をくまなく探した結果。バケツや鍋などある程度使えそうなものが手に入った。

「これで水が汲めそうね…さっきの泉の場所に行きましょうか…。」
と哀が言うとコナンは

「そうだな…。」

と答えて二人で泉の方へ向かった。

コナンがふと空を見上げると今にも雨が降り出しそうな雲が広がっていた。

「ひと雨きそうだな…。」

とコナンが言うと同様に空を見上げた哀が

「そうね…早く水を汲んで一旦砂浜まで戻りましょう…。」
と言いながら歩き出す。

「そうだな…。」

と答えるとコナンもそれに続く。

東の泉

コナンが先ほどのバケツで水をすくうとぽつぽつと雨が降ってきた。

「降ってきやがった！」

と言うとコナンと哀は走り出した。

東の森

コナンと哀は走っているときに見つけた雨がしのげそうな木の下で雨宿りをしていた。

「結構降るわね…。」

と哀が言うとコナンは

「ああ…大丈夫か？灰原…その…服とかずいぶん濡れてるみたいだけど。」

と言った。

「別に大丈夫よ…。」

と哀がそつけなく答えるとコナンは

「そうか…。」

と答えた。

しばらくたつて雨がやむと二人は一旦最初に流れ着いた砂浜に戻つて来るとだいぶ暗くなつており西の方の海に夕日が沈んでいくところだった。

「つで…これからどうするわけ？」

と哀が聞くとコナンは

「どうするつて…あの様子を見る限りだとこの島には住民がいない可能性が高いな…だからなんとかこのあたりを通る船に気づいてもらわないと…。」

と答えた。

「まだ島の半分も言つてないけど…反対側には誰がいるんじゃないのかしら？」

と哀が言つとコナンは

「その可能性は低いよ…あの集落跡地をあちこち見たけど港の跡もあつた…つまりかつてはあの場所がこの島で一番栄えた場所だったってわけだ…つまりあの場所に人がいないってことはこの島は完全な無人島である可能性がかなり高いとみて間違いない…だったらこの周辺の海域を通る船に気づいてもらえるように火をたいたりして目印を出すのか…もう少し島を探索するか…。」

とコナンが言つと哀は

「でも…どちらにしろまともな食べ物を見つけないと…そのために明日はもう少し島を探索した方がいいと思つけど…。」
と言った。

「そうだな…。」

と答えるとコナンは砂浜に座って会話している間に暗くなって出てきた星を哀と共に眺めていた。

その頃…

コナンたちが乗っていた船はあの後予定通りに港に着いた。船が港に着いた後平次が事件を無事解決して蘭たちはツアーをそこで抜けた。海上保安庁などが探しているがコナンと哀が見つかったという連絡は来ない。

「コナン君…哀ちゃん…。」

と海沿いのベンチに座っている蘭がつぶやくと小五郎がやってきて「大丈夫に決まってるだろ…あいつは結構しぶといから…きっと生きてるよ…。」

と答え蘭の横に座った。

「そうだよね…生きてるよね…二人とも…。」

と言うと蘭は立ち上がり

「少し散歩してくる…。」

と言って海岸沿いの遊歩道を歩き出した。

第3話 島内探検！（東の平野）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第4話 島内探検！（北の岬）

日が昇るとコナンと哀は東の平野を通りぬけ北の方へ向かった。

「意外と大きいわね…この島…。」

と哀が言うとコナンは

「確かに…。」

と答えながら歩き続ける。

北の岬

二人がしばらく歩くと岬の先に着いたようで前から海面が迫ってくる。

「どうやらこの岬はここまでのようね…。」

と哀が言うとコナンは横を見ながら

「そうだったみたいだな…。」

と答えた。二人は少し歩き適当なところに腰かけた。

「それにしても無人島にしては歩きやすいわね…。」

と哀が足元を見ながら言うとコナンは

「そついやそつだな…たぶんかつて住んでいた人たちが出て行つてからあまり経っていないんだろうな…。」

と答えた。

それからしばらく岬の先から海を眺めていた。そこから遠くの方まで見渡せたが島影はおろか船の姿すら見えず水平線が広がっていた。

「どうやらここまで見る限りここは絶海の孤島か…。」

とコナンが言うと哀は

「そうね…まだ西の方を見てないけどこの調子だとここは大海原にぽつんと浮かんでいる島のような…。」

と言った。

「そつだとすると船が通るのを待つしかないけど…」

「どうやら船もあり通らないようね…」

と言うような会話をしながら海を眺めているが船は一向に通らない。
「別の場所行ってみるか…もしかしたら西の方には何かあるかもしれないし…」

と言いながらコナンが立ち上がると哀は

「そうね…」

と言い立ち上がった。

コナンと哀が二人で元来た道を戻っていると哀が

「それで…これからどうするわけ？」

と聞いた。

「どうするって？」

とコナンが聞き返すと哀は

「西の方に行ってみるかどうかよ…」

と言った。するとコナンは

「もちろん行ってみるさ…それでも人が住んでいなかったらここら辺を通る船に気づいてもらうしかないな…」

と言った。

「でもここまで見る限りじゃ船はまったく通ってないわよ…」

と哀が言うところコナンは

「そうなんだよな…俺たちが乗っていた船が近くを通ってるはずだから来てもおかしくないと思うんだけど…」

と言った。

「とにかく…あっちの森の方行ってみましようか…」

と哀が言うところコナンは

「ああ…」

と答えて歩き出した。

北の岬付近

「ねえ…江戸川君…」

と哀が話しかけるとコナンは

「なんだ？」

と言った。

「いまごろこついうこと聞くのはどうかと思うけど…正直どう思ってるの？」

と哀が言うとコナンは

「どう思ってるって？」

と聞いた。

「私のことよ…やっぱり恨んでたりするのかしら？」

と哀が聞くとコナンは

「…別にそんな事ねーよ…確かに体が幼児化したときはおどろいたし自分の体をこんなにしたやつを恨んだよ…。」

と言うと一旦言葉を切り

「でもな…これはこれでよかったんじゃないかって思ってた…だってあのまま工藤新一だったら気づかないことだっていっぱいあっただろうし江戸川コナンだからこそその繋がりがもできたしな…。」

と言った。

「そう…。」

と哀が言うと二人はふたたび無言で歩いて行った。

第4話 島内探検！（北の岬）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第5話 星空の下で

コナンと哀は西の森の方へ行ったが気がうつそうと生い茂っておりあまり深く進んでしまうと森から抜けなくなる可能性が高いと考えたので東の平野の集落跡のあたりまで引き返した。

「そろそろ遅くなってきたし…このへんで寝るか？」

とコナンが聞くと哀は

「…そうね…」

と答える。

とりあえずそのままのつばらで寝るわけにもいかないので家の跡地の中で一番雨風がしのげそうな場所のところに行き二人で横になった。ここはレンガで作られた壁が少し残っており屋根こそないが周りのところよりかはましかった。ああむけに寝ると夜空にはまるで宝石をちりばめたような星空が広がっている。

「きれいな…」

と哀が言つとコナンは

「確かに…東京じゃこんな星空見れないな…」

と答える。

「ほんときれいな…お星さまの国みたい…」

と哀が言つとコナンは

「お前でもそんなこと言うんだな…」

と感心したように言った。

「悪かったわね！」

と哀が言つとコナンは

「そう怒るなよ…」

となだめる。それからしばらくの間星を眺めていたが

「でも…そんなこと言っただけなのはいつまでかしら…」

と言いながら少し暗い顔をして哀は体を起こす。

「どうするもこうするも…助けを待つしかねーだろ…。」
とコナンが答えると哀は

「そうはいつでも…この島に流れ着いてもう3日よ…何か食料を見つけないと…水だけじゃ体が持たないわ…それに…西の森は入っていないとはいえあの状況だと民家もなさそうだからこの島はほぼ確実に無人島…つまり島にいる人に助けを求めるのは不可能…だったら近くを通る船に気づいてもらうしかないけど…。」

と言った。するとコナンも起き上がり

「確かに…こうなったからには自力で食料を何とかしなきゃいけないし民家を探すよりも船に気づいてもらうようにしなきゃいけない…とは言っても今日はもう遅いからもう寝て明日作戦を考えようぜ…。」

と言いふたたび横になった。

「…そうね…。」
と言つと哀も同様に横になる。

「…。」

哀が目を覚ますとあたりはまだ暗かった。

「まだ朝じゃないのかしら…。」

と言いながら周りを見るが時計がないため確認のしようがない。

「まあいいわ…。」

と言い体を起こすと周りは暗いが横でいまだ寝ているコナンが視界に入った。

「まったく…なんだかんだ言つて平和そうな顔して寝てるわね…状況分かつてるのかしら…。」

と言った。立ち上がって少し歩くと水平線の向こうから朝日が昇ってくる。

「…まさかこんな時間に目が覚めるなんてね…。」

哀が朝日を眺めながらつぶやくと後から

「お前がこんな時間に起きることがあるんだな…。」
と言う声がした。

「あら…江戸川君…起きてたの？」

と哀が聞くとコナンは

「まあ…。」

と答える。

それから少しの間二人は日が昇り明るくなる様子を眺めていた。

第5話 星空の下で（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664y/>

コナンと哀の漂流記

2012年1月10日22時46分発行